

戸外で行われる日常生活の変容とその原因に関する研究 —広島県鞆の浦でのケーススタディ—

正会員 ○藤本ふみ\*

戸外生活 地域性 時代背景  
交流 鞆の浦

1. はじめに

**研究の背景** まちの姿は、人々の生活がつくり出した結果である。したがって都市計画においては、現在の、或は計画の結果行われる人々の生活を鮮明に描くことは重要である。更には、生活のスタイルも含めた提案が必要である。しかし、生活自体を対象にした研究は社会学等で存在するが、その成果の都市計画への還元はない。

**研究目的** 本研究では生活の中でも特に集住に伴う他者との交流が行われる可能性の高い、戸外での日常生活(以下、戸外生活)を研究対象にする。目的は、地域性を踏まえた上での過去と現在の戸外生活を把握し、両者の変容の原因を考察し、更に戸外生活の意義を再考することである。

**研究方法** 本研究は、ケーススタディの分析と考察からなる。本研究は、記述の多くは現地調査\*1による。2章はヒアリング\*2・アンケート\*3、3章はヒアリング、4章は行動調査・ヒアリング・観察による把握に基づく。

2. 江之浦元町の地域性

ケーススタディの対象地区は、広島県福山市鞆町の江之浦元町地区で、中世に港町として栄えた鞆の浦にある、200人余りの2町内会である。対象地区の戸外生活は活発であり、以下の4点に纏められる、顕在化した、昔から継承されている社会的・空間的構造や様々な文化的特質を反映している。ここではこれらについて詳述する。

**地理的特性** 鞆の浦の温かな気候に加え、元町は鞆の浦に吹く風の利点を享受し得る地形と空間構造を有しているため、特に冬暖かく夏涼しい。

**歴史** 鞆の浦発祥の地としての神話の伝承は数多く存在する。古来高密度居住が行われた漁師町である。

**居住者特性** 元町・鞆町出身者が殆どである。地元就業者と、高齢化のために無職の人が多。人々は皆率直で開放的、自分達を「人が温かい」と形容する。

**コミュニティ** 鞆町には非常に強い町内会組織が存在する。加えて祭り等を通じた強い結束がある。一方、漁師の他の職業への蔑視傾向や、町内会ごとの強い町意識、地元出身者以外に対する排他的な側面がある。

3. 過去の戸外生活

人々の記憶に残る過去の戸外生活について把握する。ヒアリングの回答は昭和 20~40 年代に集中し\*4、かつ共通した戸外生活が認められたため、これらを過去の戸外生活として 16 に分類し、各戸外生活について、それ

が行われる場所、空間性・環境、主体、時代背景と生活スタイル、その効果を考察した(図1)。

4. 現在の戸外生活

戸外生活の現状の把握として、対象地区全体の行為を行動マッピング調査\*5によりその内容と場所\*6、行為数、会話数(表1)を把握し、その中で人々の交流に重要な戸外生活について抽出し\*7、前章と同様に各戸外生活を考察した(図2)。

表1. 場所別行為数・会話数

場所	東道	小路	共有地	八百屋	五差路	神社	井戸	パン屋	海
行為数	316	77	47	41	19	16	6	6	5
会話数	53	17	12	10	6	3	0	0	0

場所	鉄工所	雑貨屋	個人駐車場	タバコ	クリーニング	浜
行為数	4	4	3	2	2	1
会話数	2	1	1	1	0	0

5. 戸外生活の変容の原因と効果

過去と現在の戸外生活を比較することで、その変容を把握し、変容の原因について明らかにした。特に、戸外生活の効果とその変容について明らかにすることで、戸外生活の意義の再考としたい。

**戸外生活変容の原因** 過去の戸外生活が変化した要因は、人口流出・少子高齢化による主体の減少、居住水準の向上、屋外環境の悪化である。つまり人々の生活スタイルの変化である。一方、戸外生活が存続する要因は、屋内空間の補完・屋外環境の快適性、居住歴の長い住民と強いコミュニティである。つまり地域性の継承による。

**戸外生活の効果とその変化** 過去の戸外生活の効果として、①居住機能の補完②交流の欲求の充足③安心・信頼④住民・地区内同業者の情報交換⑤地域文化の継承⑥地区への賑わいが挙げられる。一方、現在の戸外生活の効果に関しては、前者の②③のみであった。戸外生活は人々に多様な交流を与え、それに対応する様々な効果をもたらすが、それは失われつつあるといえる。

\*1 現地調査は2001年10月21日(土)、2002年9月20日(金)~22日(日)、11月16日(土)30日(土)、2003年1月6日(月)の計20日行った。  
\*2 ヒアリングは、50代以上の対象地区住民30人程度に対して行った。  
\*3 アンケートは、対象地区内の住民72人に対して行った。  
\*4 途中と関する回答も得られたが、状況が特殊であるため取り上げていない。  
\*5 調査員が地区内を網羅して観察できるコースを選んで歩き、周囲で起こった行動逐次記録していく方法。本研究では2002年11月18日(月)の6時から18時までの間、1時間間隔で1日12回巡回して行った。  
\*6 場所は、地区全体を空間的に連続性に24区分し分析した後、表1に分類した。  
\*7 行動調査から交流の表れである会話が起きている場所を抽出し、そこで行われている会話を中心とする戸外生活を11取り上げた。会話の特殊である路上観察も抽出これらに観察調査から得た店舗内での2の戸外生活を補足した。

図1. 過去の戶外生活(昭和20~40年代の記憶)

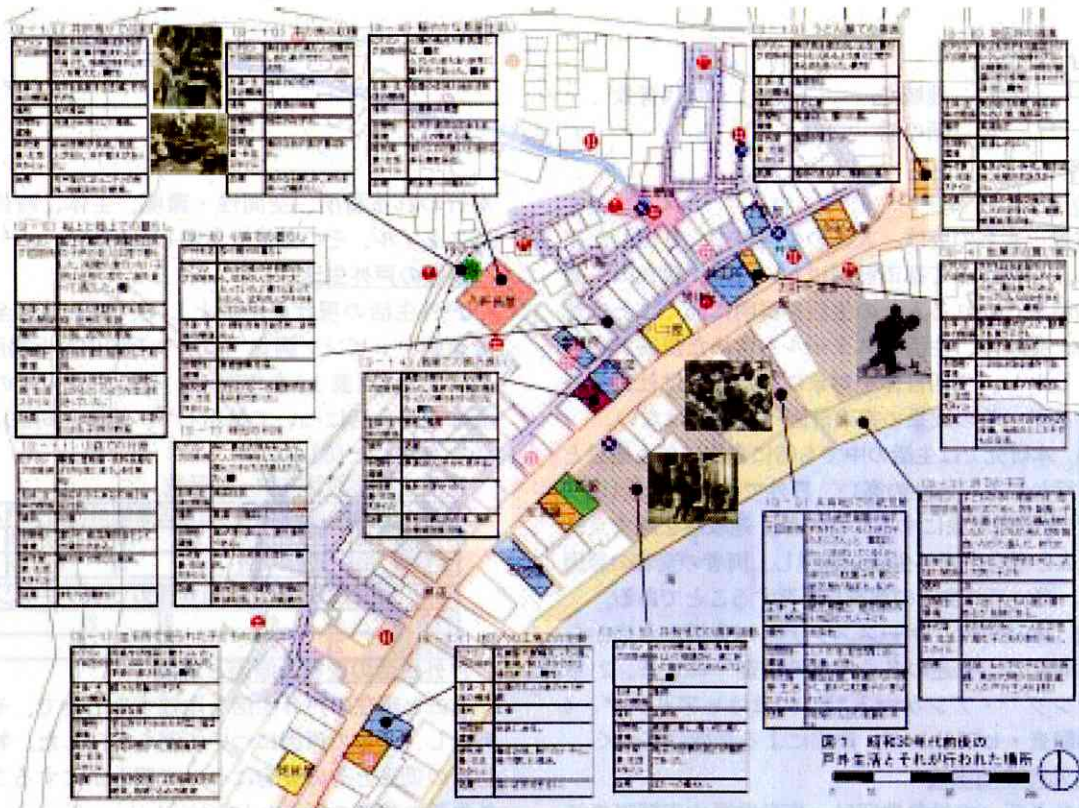
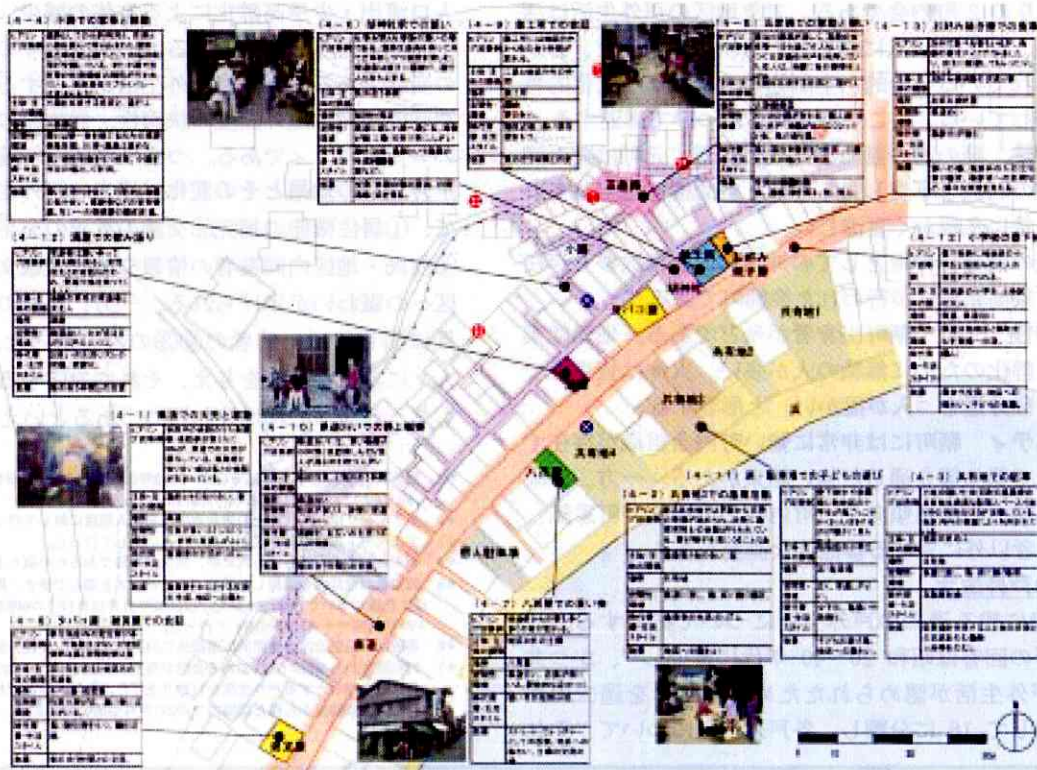


図2. 現在行われている人々の交流にとって重要な戶外生活



\* 東京大学大学院修士課程

\* Graduate School, University of Tokyo